

aPS/PT

フォスファチジルセリン依存性 抗プロトロンビン抗体

研究検査

2018年4月現在

検査概要

検査法	EIA法
検査項目	aPS/PT抗体（フォスファチジルセリン依存性抗プロトロンビン抗体） （項目コード：27105）
材料	血清
必要量	0.4 mL
保存方法	凍結
参考基準値	IgG：30.0 units 以下、IgM：30.0 units 以下
定量下限値	IgG：9.4 units、IgM：9.4 units
最低出検数	1件より（IgGとIgMの両方を測定します）
納期	所要日数 5～16日

aPS/PTとは？ 抗リン脂質抗体の一つ

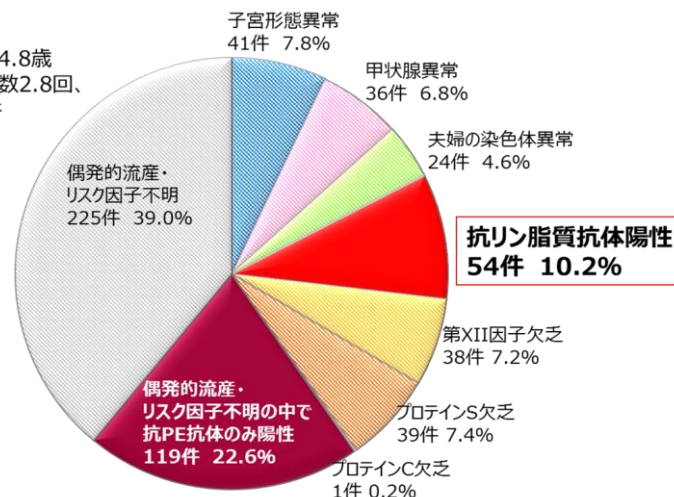
■抗リン脂質抗体症候群とは、

- 抗リン脂質抗体の出現を伴い、血栓症や不育症を特徴とする自己免疫疾患
- 最も高頻度の自己免疫疾患
 - 人口の1~5%が罹患
 - 不育症は数万人

■不育症のリスク因子

- 特定された中では抗リン脂質抗体の頻度が最も高い。
- 抗リン脂質抗体陽性は、治療可能なリスク因子として知られる。

N = 527
年齢 34.3 ± 4.8 歳
既往流産回数2.8回、
重複有43件



「反復・習慣流産（いわゆる「不育症」）の相談対応マニュアル」
（厚労省・不育症治療研究班；平成24年3月）

aPS/PT について

(フォスファチジルセリン依存性抗プロトロンビン抗体)

臨床的意義（測定意義）

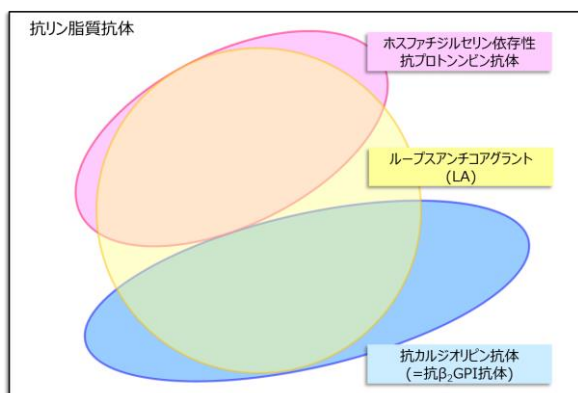
抗リン脂質抗体は、不育症において最も頻度が高いとされているリスク因子であり、治療方法が唯一確立されていることが知られています。

抗リン脂質抗体の一つであるフォスファチジルセリン依存性抗プロトロンビン抗体（aPS/PT）は、従来の抗リン脂質抗体検査よりも高感度であり、ループスアンチコアグラント（LAC）との相関性も良好であることから、最近、診断の補助として注目されています。aPS/PT検査は患者が抗凝固療法を中断する必要もなく、LACに比べて簡便に検査することができます。

aPS/PTはIgG型とIgM型の両方を検査する方が陽性率が上がることが示されています。

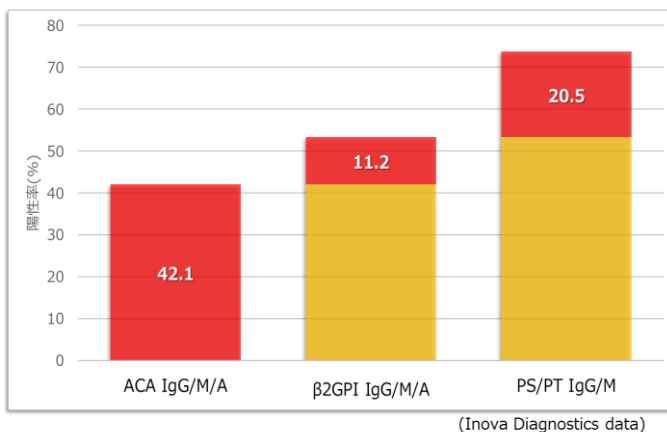
抗リン脂質抗体検査の有用性

各種抗リン脂質抗体検査の関係



抗リン脂質抗体の主な対応抗原は、 β 2グリコプロテインI (β 2GPI) とプロトロンビンであることが判明しています。¹⁾

aPS/PT IgG・IgM 検査の有用性



aPS/PT IgG・IgMを行うことにより、リン脂質抗体症候群の診断において、陽性率は73.8%まで上昇します。

(引用文献)

1. 中村浩之, 渥美達也: Thromb Med 6: 137-142, 2016

お問い合わせ



KPSL
九州プロサーチLLP

〒819-0388

福岡県福岡市西区九大新町4-1
九州プロサーチ有限責任事業組合
<https://www.kpsl.jp/>